

宗教には聖地と名付けられる場所がある。キリスト教のエルサレム、仏教のブツダガヤなどが代表であるが、イスラム教ではメッカが相当する。このメッカには一年の特定の時期に信者が巡礼するハッジという行事がある。今年は高温のため多数が死亡するという惨事が発生したが、世界から数百万人の信者が巡礼に参集する。

これに相当する日本の行事は伊勢神宮への参拝である。江戸時代以後、毎年、全国から数十万人が参拝していたが、六〇年に一度の「お蔭参り」では三〇〇万人から四〇〇万人にもなったと記録されている。このように聖地巡礼と名付けられる行事は古来、世界各地で発生しているが、最近、新型の聖地巡礼が登場してきた。

東京に唯一残存する都電の東京さくらトラムの三ノ輪橋停留所の北側にジョイフル三ノ輪商店街がある。街路の両側に八〇以上の商店が存在する普通の商店街であるが、若者が頻繁に来訪する。買物のためではなく『3年B組金八先生』『万引き家族』『家政夫のミタゾノ』などの映画や放送番組の舞台となっているため、その現場を見学に到来するのである。

同様の事例は神戸にもある。新海誠監督の映画『すずめの戸締り』は主役の女性が全国を旅行しながら探訪する物語であるが、その一部に神戸の三ノ宮駅付近にある二宮商店街が九宮筋商店街という名前で登場するため、若者が見物に来訪する。さらに六甲山中にある神戸おとぎの国も同様の理由で人気場所になっている。

神奈川県鎌倉と藤沢を連絡する私鉄の江ノ島電鉄線の鎌倉高校前駅の付近にある遮断機の設置された踏切には国内だけではなく海外からも見物の人々が殺到している。理由は累計発行部数一億七〇〇万部以上で海外でも人気のバスケットボールを主題とする漫画『スラムダンク』の一部に登場する風景ということである。

明治時代以後、三・七倍に増加してきた日本の人口は二〇〇八年に頂点となり、以後、減少に転換しているが、さらに重要な変化は都道府県単位で人口が増加しているのは東京だけで、それ以外はすべて減少に移行していることである。今後、移民政策を本格導入しなければ、この傾向を逆転させることは困難である。

そこで期待されるのが関係人口や交流人口と名付けられる国内国外から地域に到来する人口であるが、経済の視点ではなく文化の視点からの検討が重要である。従来は自然景観や歴史遺産などが人々を誘引する資源であったが、さらなる資源となりはじめたのが漫画や映画であり、ここまで紹介したのは数例である。

これが重要な意味は国内への影響だけではなく海外への影響が多大ということである。『すずめの戸締り』は国内の興行収入は一四七億円であるが、海外では二三七億円と国内の一・六倍で、日本映画の海外収入としては歴代二位である。これには金銭以上に日本の文化を理解する人々が海外で増加するという重要な意味がある。

この仕組みを国家戦略として利用したのが太平洋戦争後のアメリカで、裕福な都市や家庭の生活を題材とするハリウッド映画を輸出して敵対していた国々を懐柔するとともに、そこに登場する工業製品を輸出してきた。日本の漫画や映画に喚起された現在の聖地巡礼を国家戦略とするかには議論があるが、経済の視点ではなく文化の視点からの検討が重要である。